

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	『自奮』といふこと : 批評
Author(s)	弧松生
Citation	龍南會雜誌, 37: 66-68
Issue date	1895-06-07
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4593
Right	

批評

『自奮』といふこと

『教育雜感』を讀みて

孤松生

迂行道人は『教育雜感』と題して、平素の經驗を發表せられたり。被教育者として、多年觀察せられたるとなれば、教育家にとりては、或は他山の石ともなりしならん。道人の意見の大体に於ては、別に異論あるべき個處もなし。予輩は唯だ道人の周密なる經驗と、該博なる論辨とに感服す、故に今、予輩『教育雜感』を讀みて生じたる望蜀の感を略述し、道人の一顧を煩はさんと欲す。

抑も教育を分ちて人生初期に於ける教育と、後期に於ける教育との二となす。前者は即ち所謂普通教育にして、後者は即ち特殊教育なりとす。特殊教育を細別して、初期と後期との二となす。初期の特殊教育は所謂高等教育にして、高等の學校と相聯關し、後期の特殊教育は獨立の教育にして、學校と關係を絶てる後、生涯に涉りて繼續すべきものなり。三者各々其價值を異にすと雖も、苟も完全の人間として、生存せんと欲する者は、之を偏廢すべからざるものなり。これ人生は不斷の教育なりといふ所以なり。

この教育の中にて決して缺くべからざる要素は、自奮なること明なり。幼時の意志固定せず、興味確實ならざる間と雖も、自奮なければ、教育の効ある可らず。これ教師が百方誘導して、多方不偏の興味の發生を期し、高尚なる品性の陶冶を勉むる所以なり。高等教育に至りては、單に教授訓練を目的とせず、多分は被教育者の自奮の意志に依頼して教育を行ふ。唯だ幼時の如く、誘導的に自奮の意志に訴へざるのみ。學校を出たる後に於ては、一に自奮の意志のみを以て、自ら教育せざる可らず。此心消

耗去盡せる時こそ、その人の退歩の始まる端緒なれ。知るべし、自奮は教育を一貫せる最要の原動力なることを。豈に啻に高等教育のみに特に要々なるものならんや。

高等教育は此自奮の意志を基礎として、智能を啓發せ、徳性を陶冶せ、心身を強健にせんと欲するものなり。自奮は本源なり、根底なり。之なくんば高等教育何の効をか奏せん。苟も高等の學校に在りて、普通の理非を辨別するものならんには、誰か之を識認せざるものあらんや。

迂行道人は、先づ自奮より説き起して、自奮の必要に論結せられぬ。予輩は大体の論旨を可ならずとはせず。さはいへ、今強て予輩の考ふる所を吐露せしむれば、道人の議論は餘りに卑近に過ぎ、餘りに陳套に過ぎたる憾なき能はず。道人が餘りに明白なる事實を、故らに而していとも慇懃に、説明せられたるは、そも何の目的ありてか。予輩聊か之に不審なき能はず。道人が終始自奮の必要を説けるは、何が爲なるか。同學の士を警醒せんが爲めか。前述せる如く、此理素より明白、同學の士之を知らざるものなけん。予輩は寧ろ釋迦に説法のそまゝを知らんことを恐る。然らば現今の教育法に就て不足なる所あるが爲めか。或は然らん。然れども吾人は記せざる可らず、現今吾人が不足を感じる所以の病根は、教授の方法にあるよりも寧ろ教育の制度にあるにあらずや。予輩は信ず、予輩の理想する組織制度を得たらんには、教師其人を得、從て教授法も宜しきにかなひ、校風起り、教育の目的茲に完成するを得べきことを。道人何ぞ百尺竿頭一步を進め、此點に關して其謀策を吐露せざる。予輩は濫りに空言壯語を弄し識者を煩さんと欲するものにあらず。然れども若し、病根を治せずんば、四肢を健全にする能はず、本源を清めざれば、末流の濁を救ふ能はずとせば、予輩は寧ろ根本的問題の研究を必要とせざる可らず。

自奮の必要なること、道人も之を切言せり。高等の學校に於ては、自奮の精神を基礎とせるものなること、予輩が前に述べたる所によりても明なり。吾も人も之を知る、而して尙且十分に實行を見る能はざる傾に陥らしむるもの、抑も誰の罪ぞや。徒に學科の負擔重きを嘆息するは、固より不可なり。然

れどもこの傾あるが爲めに、學生をして眼界狹小に、見識賤陋ならしむるに至る、是れ學生の罪のみにあらずなり。此の如き點より之を見るも、吾人の研究を要する問題は、自奮の精神の勃興すべき境遇如何にあり。境遇既に意の如くならず、之に自奮を望む、恐らく功を収むること鮮し。これは自奮と云へることに就て思ひ附けるまゝ之を記せるものにして、敢て批評と云はず。又道人が『教育雜感』に於て、之に論及せざりしことを詰るにもあらず。唯だ道人の多年の經驗によりて、現今の教育制度に鑑み、如何なる理想を識得せられしやの聞かまほしければ、かくはものしつ。

前號 雜評

破天荒 生

批評を爲すの難きにあらず、批評をなして正鵠を失せざることの難き也。若し夫れ感情の上に立ちて思ふがまゝに書き流し、これをしも批評といふべくんば、是獨り道理の探究に害あるのみならず、亦已に賊するものといはざるべからず。批評家たるもの慎まざるべけんや。それぞわれ等ハ今常に進歩の境にあり、議論の要素より幾多の誤謬なきこと能はず、唯推理上已れの確信する所に據り、他の瑕を指摘し若くハ佳處を發揮す、是に於て批評の能事畢るなり。唯一片の信仰もなくして妄言するなきを要するのみ。立論に誤謬を免れざるは、御互に素より然るさうにして、却て希望ある境遇なるとを知るに足るなり。生今前號の雜評を敢て、唯信する所を憶ぶるのみ。

卷頭載する所、勤儉尙武と物理的着服との關係、前號を承けて愈奇警なる論斷に入る、文辭亦一種の風調を帶び、議論と共に福井先生の特色を觀る、論旨固より黃吻兒の月旦を敢てすべきに非らず。迂行道人の教育雜感、流石に教育家の口吻の如きさやいふべき、或誰先生の匿名にやと疑ふ人もありしか、殊に外國語の譯解を教ふるを説くあたり、予が數年來の經驗に由て云々とあるを觀て、先生と思へば先生と思はざるに非ざり、行て編輯委員に問へば、何ヤツバリ生徒と答ふ。十頁に亘れる論文、くさくさの科業教授法など説きたまふ、誠に教育家の參考に資するに足らむ、唯譯もぐく長々しく、事新しくもなきとを述べられたるは、流石に御親切に過ぎたりさやいふべき。げにや雜感ハ雜感なり、是をとり出でさういふべきか、ともなし。唯自奮に説き起して自奮に結ばれたる處、論者意の存する所を見るに足る、蓋し教育の要は注入口にあらざることは今更のことにあらず。獨逸語にて教育といふことは、引き出すといふ如き語義をも含めりとか聞きぬ。教育といふをなして、唯學識を注入せしむるにと止まらざらしめば、自奮の缺くべからざる素より也。所謂不憤不發不排不啓とは孔子も教へぬ。君が説きたまふ所、誠に千古に亘れる名論にして、須臾も忘るべからざる條件なり。詮す